

## 図説デーモン白書：ソフト編（草稿）

松枝佳紀 (yoshi@enmel.com)

### デーモンの誕生

- ・そもそもデーモンの本質はその体細胞内に寄生するエナジークリーチャーである。エナジークリーチャーが生産する余剰エネルギーを求めて幾多の微生物がエナジークリーチャーの周りに集まり合体した。有性生殖や突然変異に比べ進化スピードの速いホメオティック接合を繰り返すなかで、この生命体は「意識」を獲得した。これがデーモンである。デーモンは、中生代初期には、いち早く「脳記憶」を利用する知的生命体となり2足歩行をはじめた。
- ・デーモンが知性を獲得した一番の理由は、恐竜に対抗するためである。
- ・地球気候の温暖化安定化は、保守的進化をおこなう有性生殖生物の繁殖にとって非常に好都合な環境をもたらした。その有性生殖型生物の発展形態が恐竜というわけである。

### 恐竜の時代

- ・デーモンは意識を獲得していく中で、現在の人類に近い形態をとり始める（少数いる水棲デーモンは別）が、その形態は恐竜という獰猛な動物に比較してひ弱いものであった。デーモンは恐竜に対する脅威と恐竜に対抗する必要から文明を築き始めるのである。
- ・ちなみにホメオティック接合によって恐竜と合体してしまえばよいと思われるかもしれない。実際そのようなデーモンも居るにはいた。だが恐竜と合体したデーモンはホメオティック接合の能力を失い、恐竜にのっとられる場合が非常に多かった。それはおそらく恐竜が強大な腕力を手に入れたことに由来するが、恐竜はこれ以上の進化を必要としない生物であったことから、急速進化というホメオティック接合の特性はむしろ邪魔だった。デーモンが恐竜に合体し自らの本質を見失うということは言ってみれば、ハングリー精神で世界チャンピオンになったボクサーが大金を手にし贅沢な暮らしをはじめ弱くなってしまふことに似ている。デーモンの持つホメオティック接合の能力は、環境に順応した恐竜のかい図体に吸収されてしまったのだと考えられる。
- ・したがってデーモンの多くは恐竜と合体することも自殺に等しかったために、巨大で恐るべき恐竜から逃げまどうしかなかったのである。

### デーモン文明の始まり

- ・恐竜から身を守るために、デーモンは集団で暮らすようになった。
- ・身を守るために、役割の分担＝「分業体制」が生まれ、仲間に注意喚起を促すための合図として「言語」が生まれた。
- ・村をより安全に導く者が自然と村の長となるようになり、デーモン族に「上下関係」や「階級」が生まれた。

- ・「分業体制」が生産における効率性をもたらした。
- ・すなわち下級デーモンは自分の必要以上に獲物を獲得するようになり、そのあまった獲物を、上級デーモンに上納するようになった。
- ・余剰生産力を獲得したデーモン集団は、余剰エネルギーを蕩尽するため、社会制度と宗教、そして戦争を発明した（もっぱらこのあたりは人類と同じ道行き、人類史の先取りである）。

### デーモンの宗教

- ・デーモンは地底生命体であった頃からの記憶を「生体記憶」という形でぼんやりと引きずっている。太陽の光から恩恵を受けるよりも、地底から恩恵を受けることのほうが多かった。したがって、人類の多くが太陽神をあがめるのとは異なり、デーモンたちは地底神をあがめる。

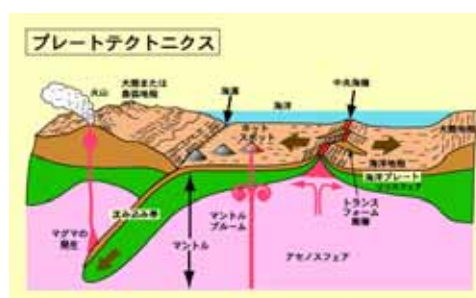
### デーモン文明の時代

- ・超大陸パンゲアが分離し大陸移動が始まった時代。

### 大陸移動説

- ・ドイツのアルフレッド＝ウェゲナー（1880～1930）は、米国南米東海岸と欧州アフリカ西海岸がパズルのように形が一致すること、大西洋兩岸の対応する部分の地質や化石に多くの共通点があることを見出す。そして両大陸はもともとひとつの大陸であり、移動して二つに分かれたという大陸移動説を唱えた（1912年）。当時、この説は状況証拠どまりで、大陸移動そのものを説明する理屈がなかったが、20世紀後半に入って地球物理学がこれを科学的に証明した。1955年、S.K.Runcornが、ヨーロッパと北米の岩石から求めた極磁の位置変化

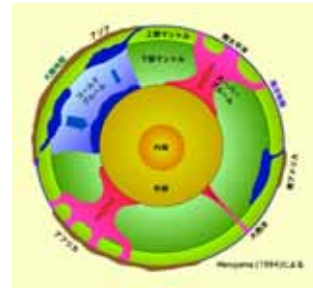
の謎を、大陸の移動で説明できることを証明。にわかに大陸移動説が復活する。1970年代にはプレート・テクトニクス理論が完成。これは、地球内部にある高温マグマの流体の上にプレートのような大陸が浮かんで移動していると考



(1) プレートテクトニクス理論

える理論。ちなみに大陸移動説が認められる以前に手塚治虫は大陸移動の原因となる未知のエネルギー源「ムーンライトストーン」を目当てにやってきた人間とそれを守る動物たちの話を書いている。1950年に連載の始まった「ジャングル大帝」がそれである。

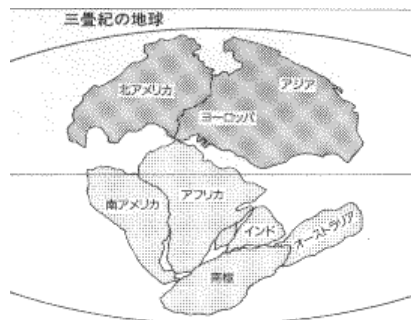
- ・現在ポスト・プレート・テクトニクス理論として世界的に認められつつある理論は、東工大の丸山茂徳教授が主導的に唱えているブルーム・テクトニクス理論である。
- ・ブルーム・テクトニクス理論がプレートテクトニクス理論と異なるのは地球表面のプレートの移動にスポットを当てるのではなく、地球の核内の動き、流体としての地球内部構造から地球すべての活動を統一的に説明する理論であるということである。



(2)ブルームテクトニクス理論

### 超大陸パンゲアそして南北大陸の分裂

- ・大陸移動説によると \* 億年前、地球にたった一つの大陸パンゲアが誕生した。
- ・この大陸は \* 奥年前に南北に分離する。将来北部アメリカとヨーロッパ、そしてアジアになる北部大陸のローレシア大陸と、将来南アメリカ、アフリカ、インド、オーストラリア、南極になる南部大陸のゴンドワナ大陸である。
- ・この大陸分裂と同時期にデーモン族の文明史は始まる。



パンゲア大陸が南北の2大大陸に分裂する寸前のようす。上の塊がローレシア大陸、下の塊がゴンドワナ大陸である。

### デーモンの歴史を記した唯一の書アカルア年代記

- ・ほぼ不死の存在であるデーモンは、注意喚起のための雄たけびなど同時性言語を持つが、歴史書を書くなどという非同時性言語はもたないと考えられていた。
- ・しかし後年、デーモンが書き記したと思われるデーモンの歴史書アカルア年代記なる書物が発見される。このアカルア年代記はもともとアフリカのアカルア族が保有していたもので、15世紀フランスの探検家が手に入れたものである。これはいつしかトゥールーズのサタニストの手に渡り、悪魔崇拝者たちの聖書となったものである。
- ・いくつもの写本があるが、もっともまとまりのある書物はゴンドワナ書と呼ばれている。
- ・なぜデーモンがこのような書物を書き残したのか、本当にデーモンが書き残したものなのか、どのようにして人類の手に渡ったのか、など明らかにならない問題がいくつもあ
- ・実のところ、これは後期デーモン文明において表れ、デーモン7族の支配者となったデー

ーモン第8番目の部族シャヘル族（天使族）が書き残したものが元になっている。

### デーモン戦乱の時代

- ・デーモンの集落同士の戦い。

### デーモン七族の成立

- ・アカルア年代記 Gondwana 書によれば、繰り返される戦いの歴史の末デーモンは、デーモン7族と呼ばれる7つのグループに落ち着いた。
- ・もちろんデーモンは個体個体の形状がかなり異なっているのでこの分類は戦闘集団としてのまとまりにすぎない。しかし、同族は同じような地域に住むため、同じような動物との合体、同じような動植物の捕食、同じような環境の影響からか、やはり似たような形状を持つにいたる。

### デーモン七族（未定）

- (1) ログノイア族...ローラシア北方に住む巨大な体躯を持つデーモン。爬虫類ベース。
- (2) ドラコニア族...
- (3) セロトニア族... Gondwana とローラシアの境付近に住む人間ばいデーモン。
- (4) ソドルモン族... Gondwana 東方に住む人間ばいデーモン。
- (5) ゲルゴルア族... ソドルモン族に支配される小型デーモン。小動物ベース。
- (6) サルバ族.....合体をし続ける雑種デーモン。卑しいデーモンと見下されている。
- (7) イコイコン族...ローラシア東方に住む半水棲デーモン。半魚人っぽい動物ベース。

### 宗教、倫理の発展

- ・ホメオティック接合による合体進化を続けてきたデーモン族は、有性生殖も可能な肉体を手に入れた。これは進化論的に言うと、合体型の進化だけでは個体数が増えないという問題があるからだと考えられる。
- ・だがデーモンの有性生殖には重大な問題があった。
- ・受精はほとんどの場合成功せずに、逆に妊娠をした母体はエネルギー代謝を正常に行えない体になってしまい死に至る。うまく受精しても誕生した子供は遺伝子異常のある虚弱体質という問題を背負ってしまう。
- ・こういった事態を受けて、デーモンたちは有性生殖を自らに禁じる宗教的アイデアを持つようになった。
- ・ただ有性生殖可能な肉体になってしまったことにより、有性生殖を誘発する「恋愛感情」を持つように進化してしまってもいた。
- ・ありていに言えば、ここに至って、デーモンは、男女の不純異性交遊を禁止する厳しい校則下におかれた高校生ようになってしまうのである。

### 8 番目のデーモン族の誕生

- ・デーモンの宗教で有性生殖は禁止されたが、その死の危険性にもかかわらず、有性生殖を行ってしまうデーモンが現れる。
- ・ほとんどの場合、有性生殖は自殺行為であるが、数パーセントの確率で、まともどころか、通常のデーモンよりもはるかに強いデーモン、シャヘル族が誕生する。
- ・シャヘル族は真っ白い肌と羽を持つ天使のような姿をしている。このことから後世代、シャヘル族は天使族と呼ばれる。
- ・デーモンたちに奇形とされ捨てられたシャヘル族のこどもたち。集まって成長。いつの間にか強大な集落を作るようになる。
- ・シャヘル族はパワー、精神力、知性においても遥かに他のデーモンを上回っている。だが、問題点もあり、それは両性具有であり、有性生殖能力も無く、またデーモンとしての合体能力も無いということなのであった。したがって、デーモンならばさほど気にする必要の無い「寿命」というものが大きく問題となってくるのである。
- ・とは言うものの当面はデーモン史における最強の存在として登場したことになる。

### シャヘル族のデーモン支配

- ・シャヘル族は、デーモンたちを支配し、南米のインディオたちを従えたスペイン人達のようになる。
- ・デーモンたちははじめシャヘル族を神と考える。
- ・また早々とシャヘル族の軍門に下るデーモンたち。
- ・結果として、半数のデーモンはシャヘル族に支配される。

### いずれの勢力にも属さないデーモンたちの存在

- ・デーモン7族いずれにも属さず群れを成さないデーモンが居る。
- ・むちゃくちゃ強いアモンもこの一匹狼デーモンの1人である。
- ・一匹狼デーモンは、デーモン同士の戦いに手を貸す傭兵デーモンである。
- ・ピンチランナー的あるいは七人の侍的に集まる傭兵デーモン。

### シャヘル族は東のデーモン、セロトニア族を襲撃する。

- ・セロトニア族は、デーモン世界的には、もっとも平和的な国を築き上げている。
- ・セロトニアは巫女シレーヌがトップに付いている国である。
- ・シレーヌはまだ妖鳥の姿になっていない。少女の姿。完全な人型デーモンである。
- ・心優しい王女として国民から慕われている。
- ・バルコニーに出て国民に手をふる姿。その肩には進化した始祖鳥スワンが止まっている。
- ・シャヘル族の軍門に下ったソドルモン族が攻めてくる。

- ・シレーヌは百戦錬磨の勇者アモンを雇う。
- ・アモンはソドルモンを蹴散らす。
- ・セロトニアの平和が守られる。

#### 一方シャヘル帝国

- ・長老シャレムが寿命で死ぬ。
- ・国家の最高機関元老院ではシャヘル族の寿命が問題になっている。
- ・「これで今年に入って 126 人が老化によって死んでいる。どう対処するか」「デーモンたちを捕らえて、有性生殖をさせ、子供を得るという方法が最も現実的である」「下等な生命体から、我々のような高等な生命体が発生するとはあってはならんことだ。認めることは出来ない。」「ならばむざむざと数を減らしてゆくだけか?」「研究を加速しよう」
- ・元老院は「研究」の加速を決定する。
- ・「研究」とはデーモン族の助けをかりず天使族自身が有性生殖をおこなって独自に子孫を増やせるようにするという研究である。
- ・つまりシャレム族がプロトタイプガンダムなら、GM すなわち量産型ガンダムを作ろうというアイデアである。
- ・その「研究」のために捕獲され惨殺されるデーモンたち。
- ・その様子を見ている若きルシファー。疑問を感じる。
- ・「天使族のほうが発端であるはずなのに、我が物顔でデーモンを虐げ、落ち着き始めた世界に無理やりまた戦乱を巻き起こそうとしている。我々シャレム族のやっていることは本当に正しいのだろうか。自然に生きて滅亡してしまう我々ならば無理な実験などせずに消えてしまえばよいのではないだろうか」
- ・元老院のやり方に疑問をさしはさむルシファーは思想矯正のために現場に行くべしと元老院が判断、セロトニア掃討軍の司令官に任命される。

#### 戦乱の中の恋

- ・アモンの協力でシャヘルの第一次軍を破ったセロトニア。
- ・感謝する王女シレーヌはアモンに恋をする。
- ・だがデーモンにとって有性生殖につながる恋はご法度である。
- ・プラトニックな恋というかんじ。
- ・アモンのほうはまったくそういう感情はない。

#### サルバ族の族長カイク

- ・サルバ族はほかのデーモンたちと異なり、理性を犠牲にしてもガンガン合体するタイプの卑しい雑種デーモンである。そしてその族長を務めるのがカイクである。
- ・しかし卑しいといえどもカイクはシャヘル族の軍門に下ることを良しとせず、セロトニ

アと手を結ぶことを決意した。前回のシャヘル第一次軍をアモンが破ったのは、カイク率いるサルバ族が大量の援軍を出したからでもあった。

- ・カイクもまた囃らずもシレーヌに恋をするが、自己表現の方法を知らないデーモンたちの恋はまるで中学生のはじめての恋のようで、もじもじプラトニックなのであった。

### **ドラコニア族の族長ゼノン**

- ・ドラコニア族はさっさと天使族の軍門に下ったデーモンである。その族長ゼノンが第二次セロトニア征討軍の参謀となる。
- ・征討軍の司令官ルシファーは「族長とあろうものが天使族の下僕になり悔しくないのか」とゼノンに訊ねる。ゼノンは何も答えないが、族長としてドラコニアを守るためのギリギリの判断をした、その答えがこれなのであった。
- ・この後、長い戦乱の中で、ルシファーはゼノンの信頼を勝ち得ていく。ルシファーが天使族に反乱するとき真っ先に付き従ったのはゼノンなのである。

### **第二次セロトニア戦**

- ・ルシファーたちの囷作戦にまんまとはめられてアモン、カイクの主要軍はセロトニアの宮殿を留守にってしまう。
- ・ゼノンらがセロトニアを急襲。
- ・セロトニアはほぼ壊滅状態になる。
- ・だがシレーヌは助かった。
- ・危険が迫ったときいつも一緒にいたスワンが、シレーヌに化けたためである。ゼノンたちは誤ってスワンの首を持ってかえる。
- ・シレーヌ目を覚ますと首を無くしたスワンの遺骸。泣き崩れるシレーヌ。天使族に対する復讐を誓いスワンを食べる。すると合体が始まり、鳥の羽が頭から生え、手足が鳥の鉤爪になってゆく。
- ・ルシファーはアモン、カイクをも捕らえる。  
(ルシファーはアモンの戦いを見てほれた...?)

### **ルシファーの凱旋**

- ・300年の戦争の後、大勝利を引っさげてルシファーは天使たちの宮殿に帰還する。
- ・アモン、カイク、そして残ったセロトニアのデーモンたちが引き渡される。
- ・ルシファーは元老院のやり方に対する懐疑も忘れて初勝利に酔いしれる。

### **量産型天使**

- ・だがルシファーは偶然「研究」の結果が出たこと、それを耳にしてしまう。研究員達の後をつけ研究所に侵入するルシファー。

- ・ルシファーがそこで見たものは、量産型の天使、有性生殖を可能とした天使、すなわち人間の姿であった。羽を失い、肌色の無防備な裸体をさらす小さな人間の男女はルシファーを見ておびえていた。研究室の電気がつきとっさに姿を隠すルシファー。入ってきたのは研究員達であった。研究員達の話を読み聞くと、どうやら「研究」が失敗に終わったことがわかってきた。そして研究員達が去った後に、再び人間達を見ると、そこには今さっきの研究員達に握りつぶされたのだろう。血だらけになって抱き合いながら痙攣して倒れている人間の屍骸があった。
- ・ルシファーは憤り元老達にくっついてかかる。
- ・元老達は不機嫌になりながらもルシファーを説得しようとする。
- ・量産型天使すなわち人間達を進化促進装置に入れて急進化させてみた。結果、その凶暴性、残忍性、バランス失調が判明した。我々天使およびデーモンはどんなに自由に振舞おうとも自らの存立基盤である地球を破壊はしないが、この人間という奴は違う。これはある意味自然界の復元バランスを失調させるウィルスだ。必ずや地球を滅亡に、死の星に変えてしまうだろう。だから失敗作なのだ。現在誕生している分、及び培養液の中で「種子」として生きている分、すべてを処分する。それが元老院の決定である。
- ・ルシファーは自分の都合のために生命を誕生させておきながら、失敗したとなるとすぐにこれを滅亡させるという、その天使たちの身勝手さに再び怒りを取り戻す。

### 天使たちの残虐

- ・セロトニア戦で捕虜となったセロトニアのデーモン族は量産型天使を誕生させるための材料としてモルモットにされた。
- ・アモン、カイクは特別扱い。戦闘獣として利用しようと生かされていた。
- ・ルシファー、これを内緒で脱出させてやる。
- ・他のデーモンたちもろくな待遇でない。
- ・なにより、量産型天使を誕生させるためのエネルギー源として、エナジークリーチャーの獲得を急いだ天使たちは、デーモンを次々に殺してその細胞内のエナジークリーチャーを取り出す作業をしていた。

### ルシファーを先頭としたデーモン軍の決起

- ・天使たちにルシファーは「敵対するもの(サタン)」と呼ばれる。
- ・ゼノン、アモン、カイク、シレーヌ、サイコジェニーなどそろそろ。

### 天使たちに勝利するサタン軍

#### 研究所に残っていた人類の「種子」

- ・ただ進化促進装置は天使の死滅とともに失われてしまった。



- ・ 種子を育てるには実時間として7000万年のときが必要。
- ・ 人類の誕生を待つために南極下の地底湖で7000万年の眠りに就くサタンたち。

### **サタンの復活**

- ・ 人間が掘削船でたまたま発見したから眠りを覚まされたのではない。
- ・ もともと計画どおりである。
- ・ だが目覚めてサタンは愕然とした。
- ・ 天使たち元老院の奴らが言うように、人間は地球を破壊する力を持ち、実際にそのパワーを振るう可能性があった。
- ・ 自分が信頼してまいた種が、地球を滅ぼすことになりそう。サタンは責任をとって人間を始末する必要があった。

### **シャヘル族の作り上げた社会システムについて**

- ・ 階級制度
- ・ 生産システム
- ・ デーモン支配の仕組み
- ・ 軍隊
- ・ ルシファー（サタン）の位置付け

### **ドラコニア国の参謀サイコジェニー**